

# 幼稚園教職課程「幼児理解」の学び： 保育・教育の両義性・多様性の気づき

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下温湯, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4915">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4915</a>

# 幼稚園教職課程「幼児理解」の学び —保育・教育の両義性・多様性の気づき—

児童教育学部 児童教育学科 下温湯 まゆみ

**要旨：**幼稚園教職課程「幼児理解の理論及び方法」(本学科では、科目名「幼児理解」)の2022年度の実践をまとめた。授業では、保育事例・保育写真・保育動画・文献・研究データ等の教材を取り入れて、学生が実践の様子をイメージしやすく、子どもや保育者等の思いがリアルに感じられるように内容を構成した。また、発表の場やグループワークを設定し、交流したり意見交換したりする体験を重視した。様々な保育実践を通して、学生は、保育には両義性や多様性が常に存在していることに気づき、保育者が幼児理解をもとにそれぞれの場面で判断をしており、保育者の経験や保育観が幼児理解や判断に影響していることを理解し始めている。特別支援教育や保護者支援に関する内容の理解と対応は、学生にとっては難しいが、これまでの科目で学んできた知識や実習体験を駆使して考察しようとする態度が見られた。振り返りアンケートから、学生は本科目の到達目標である「幼児理解」の基本的な考えや態度を身に付け、保育者のねらいや子どもに対する思いを推測して、対応や援助のあり方について理解を深めることができたのではないかと考える。

**キーワード：**幼児理解の理論及び方法、幼稚園教員養成、保育者養成、多様性、両義性

## I 幼児理解の基本と保育者養成段階の体験

### 1. 幼児理解とは

教職課程コアカリキュラム「幼児理解の理論及び方法」は、児童教育学科では科目名を「幼児理解」として実施している。

「幼児理解に基づいた評価」(文部科学省、2019)<sup>1)</sup>には、幼稚園教育の充実のための基本的な視点として、「幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくる」と記述されている。その中の「幼児を理解する」とは、「一人一人の幼児と直接的に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指している」と定義づけている。幼児理解は保育の出発点であり、保育者に欠かさない専門性である。

幼稚園教育要領<sup>2)</sup>には、幼児理解の具体的な内容について「興味や関心」「発達の実情」「一人一人のよさや可能性」等が挙げられている。また、幼稚園教育要領解説<sup>3)</sup>には、「その幼児が今、何に興味を持っているのか、何を実現しようとしているのか、何を感しているのか」「どのような体験を積み重ねているのか」

等を捉えると記述されている。さらに、幼児理解をするためには、保育者が「幼児と生活を共にしながら」捉え続けていき、「身体全体で表現する幼児の思いや気持ちを丁寧に感じ取ろうとすることが大切である」として、保育者の子どもに関わる姿勢について言及している。子どもと気持ちを通わせながら保育や生活を一緒に創り出していこうとする保育者の姿を思い描くことができる。

### 2. 幼児理解に基づく保育の振り返りと保育者理解

幼児理解は指導計画・保育実践・評価という一連の保育の営みの中の根幹である。保育者は保育実践の中で子どもの姿、子どもの体験の意味、子どもの変容とその要因を捉え、これからの発達の見通しについて思いをめぐらせている。保育者の指導・援助の影響や成果は、子どもの姿にすぐに、あるいは時間をおいて表れるため、保育者は保育をしながら、あるいは保育の連続性の中で幼児理解を進め、幼児理解に基づいて振り返りと改善を行っている。そして、子どもが主体的に活動しながら育ってほしい力を身に付けることができるように、必要な体験を計画している。「評価は、幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である」(文部科学省、2019)とされ

ているように、幼児理解と指導・援助は双方が絡み合っ  
て進んでいくものである。つまり、幼児理解をすること  
により、保育者の具体的な働きかけやその思いを再  
認識することになり、保育実践を見直す機会となる。

幼児理解や指導・援助は、保育者の主観的な視点か  
ら始まる。また、子どもと保育者の関係性の中で進行  
していくという個別的な特徴を有している。そのため、  
保育者自身の経験や保育観が幼児理解や指導・援助に  
影響していることに気づき、自身の価値観や子どもを  
見るときの特徴や傾向について自覚し、子どもの見方  
が大きく偏っていないかを検証していく必要がある。  
保育者一人一人の主体性を生かしながら、広い視点  
をもち考えを深めていくことが、保育者の成長過程で  
あると考える。

### 3. 保育者養成段階に求められるもの

文部科学省（2002）<sup>4)</sup>は、幼稚園教員に求められる  
専門性として、「幼児を内面から理解し、総合的に指  
導する力、具体的に保育を構想する力、実践力、得意  
分野の育成」等を挙げている。その後、中教審答申  
（2015）<sup>4)</sup>では、これからの時代の教員に求められる  
資質能力をあらためて提示している。

保育教諭養成課程研究会（2017）<sup>6)</sup>は、文部科学省  
の委託を受けて、幼稚園教諭の在り方に関する調査研  
究及び報告を行った。その中で、中教審答申（2015）  
を踏まえて、これからの時代の幼稚園教諭に求められ  
る資質能力の3つの視点をもとに説明を行っている。  
3つの視点とは、①幼稚園教諭として不易とされる資  
質能力、②新たな課題に対応できる力、③組織的・協  
働的に諸問題を解決する力である。「幼児理解の理論  
及び方法」の科目で意識する内容としては、②に記述  
されている「自律的に学ぶ姿勢を持ち、自らの資質能  
力を向上させ、情報活用能力や知識の構造化を指摘し、  
新たな課題に対応できる力を付けること」「これまで  
求められてきた幼児理解に加えて、保護者理解、保護  
者を通した幼児理解、さらに、幼児の姿を通した保護  
者理解が求められ、これらに対応できる力が必要であ  
ること」、③に記述されている「限られた人材の中で  
効果的に連携し仕事を分担するなどの組織的・協働的  
に諸課題の解決に取り組む力の醸成」等があたりと考  
えられる。

しかしながら、研究会報告書には、幼稚園教諭・保  
育教諭としての成長過程の中で、養成段階で大切にし  
たいことは、「幼稚園教育についての基礎的な知識や  
理解、技能を修得することが課題であるが、これらの

修得過程を通して、「実習などいろいろ大変だが、やっ  
ぱり子供が好き」という、子供に対する温かな関心や  
感情をもつことである」と述べている。保育者のキャ  
リアを見据えると、複雑化して見通しがもちにくい社  
会の中で様々な力を身に付けることが必要であると考  
えられているが、養成段階では基礎を身につけ、子ど  
もへの関心や興味を育てていくことがまずは大切と考  
えられている。

そのため、「幼児理解の理論及び方法」の科目では、  
幼児を理解する力、幼児理解に基づいて対応や援助を  
考える力、保育を振り返り評価する力、様々な教材を  
工夫し環境を構成する力など基礎的な保育力を育み、  
子どもへの関心を深め、保育を面白いと感じる気持  
ちを高めながら、将来的に必要とされる様々な力の種  
をまくような取り組みが求められていると考える。

### 4. 保育者養成段階の体験

高濱（2000）<sup>7)</sup>は、保育者を〈初心者〉〈中堅者〉  
〈経験者〉に分けて、熟達化プロセスについて研究を  
行っている。その結果、幼児と指導についての知識は  
〈初心者〉より〈中堅者〉と〈経験者〉で多く、〈中  
堅者〉と〈経験者〉の知識量に差はないが、〈経験者〉  
の知識はより構造化されていることが分かった。また、  
対応の難しさの認識に差はないが、難しさの認識の理  
由には違いがあり、〈経験者〉は指導の難しい幼児に  
多くの推論をし、幼児の具体的かつ詳細な文脈情報  
を使ってとらえていることが分かった。これらのことか  
ら、養成段階の学生には、まずは幼児に関する知識、  
指導についての知識を得ることが必要である。次に、  
〈経験者〉が見ているところやその見方、見通しの持  
ち方に触れる体験ができればよいのではないだろうか。  
また、対応が難しい事例に対して、子どもの気持ちを  
深く読みとり、対応の方法を複数考えていくような体  
験ができればよいのではないだろうか。

佐藤・相良（2017）<sup>8)</sup>は、幼児理解の視点を〈外面  
的理解〉〈内面的理解〉〈背景〉〈他者の内面理解〉に分  
類し、幼児理解の視点の違いについて〈新人保育者〉  
と〈ベテラン保育者〉を比較している。その結果、  
〈新人保育者〉は、幼児の外面的に見て取れることを  
手がかりに内面的理解の両方を合わせて幼児の行為の  
意味を探り表層的に理解しており、〈ベテラン保育者〉  
は、幼児の背後にある環境や事柄へと意識が向き、  
〈背景〉つまり人間関係、環境、家庭、発達、性格、  
身体面等にまで考えが及んでいくことが分かった。ま  
た、幼児の内面を推測する際、〈新人保育者〉は独自

の解釈や印象を投影した記述が見られ、〈ベテラン保育者〉は、対象の幼児の立場で興味・関心等、知的好奇心の側面から理解を進めていることが分かった。これらのことから、幼児の立場に立つとはどういうことなのかに触れ、外面的には見えない幼児の内面や普段の生活から得ている背景の情報が幼児理解に生かされていることを知る体験ができればよいのではないだろうか。

## II 2022年度「幼児理解」の概要

### 【授業の位置づけ】

幼稚園教諭免許取得のための必修科目であり、児童教育学科の基礎・基幹科目である。3年次秋期に担当されている。

### 【授業の到達目標】

1. 多様な視点から幼児を理解する方法を身につけることができる。
2. 幼児を理解するための基本的な考えや態度を身につけることができる。
3. 幼児理解に基づく保育者としての対応や援助のあり方について理解を深めることができる。
4. 幼児理解とともに保護者や地域との連携、子育て支援について理解を深めることができる。

### 【授業方法】

筆者は2022年度に初めて担当し、授業は対面で2クラスに分けて実施した。授業内容には保育事例、保育写真、保育動画、文献、研究データ等を取り入れて、具体的な保育・教育実践をもとに、学生が子どもや保育者の思いを考察できるように工夫した。保育事例は、テキスト記載の事例<sup>9)</sup>と筆者の実践事例を用いた。授業プリントと課題用紙を毎回配付し、学生は事例検討や発表、グループワーク等を行い、検討内容や感想を課題用紙に記入して提出してもらった。課題用紙は次の回で返却し、全体にフィードバックを行い情報を共有した。授業は指定席のため期間中に席替えを行い、グループワークは教員のグループ分けをもとに出席状況等によって学生が判断をして3～5名のグループになるように編成した。

### 【履修生】

履修生は122名で、内訳は幼児保育コース（保育者を旨す）86名、児童教育コース（小学校教員を旨す）25名、教科教育コース（中学校教員を旨す）

11名である。学生の大半は、保育所実習Ⅰ・保育所実習Ⅱ・施設実習Ⅰ・小学校教育実習のいずれかの実習またはその複数を体験している。

### 【倫理的配慮】

授業効果の検証を行うために、課題プリントの記述や発表内容について研究に使用すること、その際に個人名が特定されない方法を取ることを学生に説明して許可を得た。

### 【授業実施内容】

	講義内容 ★演習内容
1	「幼児理解」で学ぶ内容 ・科目の位置づけ、授業内容、授業方法 ・運動会の取り組み（運動会の絵から読みとる子どもの思い、運動会に向けての活動と演目の工夫） ★事例検討（記述）
2	子ども理解の意義 ・幼児理解に基づいた評価 ・保育における子ども理解の意義 ★事例検討（発表・記述）
3	子ども理解と幼児教育の基本 ・養護と教育の一体性、保育のねらいと内容、3つの柱、10の姿 ★事例検討（発表・記述）
4	保育者と子どもの関係1 ・保育の両義的側面 ・保育者の本音に迫る ・保育者・教員の価値観が子どもに与える影響 ★事例検討（発表・記述）
5	保育者と子どもの関係2 ・子どもが保育者・教員に期待することと信頼関係 ・人的環境としての保育者の影響 ・保育者の援助・指導の方法 ★事例検討（発表・記述）
6	子ども同士の関係づくりと集団の育ち ・子ども相互の関わりを支える保育者の役割 ・集団の中での対話的な学びとは ★グループワーク〔子どもが大人に求めるもの・大人が子どもに求めるものを両方の立場から考える〕
7	保育環境の理解 ・環境を通して行う保育 ・子ども理解と環境の構成・再構成 ・いろいろな保育環境を知る ★事例検討（発表・記述）

8	子ども理解の実際1 ・4歳児の成長を追った保育動画を視聴する ★レポートの作成
9	子ども理解の実際2 ・5歳児の成長を追った保育動画を視聴する ★レポートの作成
10	子ども理解のための記録と評価 ・子どもをよく見る ・子ども理解のための記録 ・いろいろな記録の方法を知る ★グループワークと発表〔子どもとその保護者への援助をチームの視点から包括的に考える〕
11	子ども理解のための教職員・保護者の連携 ・教職員の関係作り ・情報共有のための体制を整え工夫する ★グループワークと発表〔保育職・教職への就職について意見・情報交換する〕
12	特別な配慮を要する子どもの理解と援助1 ・特別な配慮を要する子どもとは ・困っている先生と困っている子ども ・様々な子育て観と子どもの内面の尊重 ★グループワークと発表〔事例をもとに、保護者への具体的な対応方法を考える〕
13	発達の連続性と就学への支援 ・幼小接続に至る経緯 ・幼小接続・保幼小連携の実際 ・保育から授業へのつながりを考える ★事例検討（発表・記述）
14	特別な配慮を要する子どもの理解と援助2 ・特別支援教育をテーマにした保育動画を視聴する ★レポートの作成
15	まとめ 振り返りと学びの確認 ★グループワークと発表〔前回保育動画の子ども理解と援助方法について意見交換する〕 ★アンケート〔自身の学びと課題を捉える〕

### Ⅲ 実践報告

#### 1. 幼児理解と援助の両義性

(第2回：学生発表および記述の集計、第3回：フィードバック)

〈授業の流れ〉

〈事例の概要〉

・5歳児クラス5月 Aくん  
・男性の担任と男の子たちが相撲を取っている。その中でAくんだけは何度も勝負を挑んでくるが、先生は「ここでわざと負けてはばれてしまう」と手を抜かずに応えていた。最後はAくんが泣きながら先生にかかっていくという状態になってしまった。

学生には、「①Aくんをどのような子どもと思うか、②もし担任だったらどのようにAくんに関わるか」という内容で考えてもらい、発表してもらった。最後に、感想を記入してもらった。記入内容について以下のようにまとめた。

①Aくんをどのような子どもと思うか。 負けず嫌い、自信がある、諦めない、運動が得意、勝敗へのこだわりがある等
②Aくんへの関わり ▶子どもに負けない。 ・わざと負けない。挑戦を受け続ける。 ・手を抜かない。手加減しない。しかし、アドバイスをする。やり方を教える。コツを教える。 ・わざと負けない。「クラスで一番強かったよ」「強いな！」と声をかける。 ・「負けても大丈夫、また勝てばよい」と伝える。 ▶子どもに負ける。 ・わざと負ける。 ・泣く前に、少し手加減して勝たせる。 ・先生がスタミナ切れをしたということで、勝たせる。 ・2、3回やって負ける。最後は負ける。何回かに1回は負ける。 ▶その他 ・引き分けで終わる。 ・次の日に誘って相撲を取る。「いつか負けそうやな」と声をかける。何日か相撲をして、わざと負ける。 ・もう少しで先生に勝てるという雰囲気・気持ちにする。 ・ポジティブな声かけをして、楽しい雰囲気を壊さないようにする。

この資料を第3回授業で提示し、フィードバックを行った。教員からは、〈勝負で負けることに納得がいかない子どもはたくさんいる。経験をしていく中で勝

つ人がいれば必ず負ける人がいることや、勝ってもまた挑戦できることを学んでいく〈その子どもに何を体験してほしいかや発達によっても対応は変わるだろう〉〈Aくんは引くに引けなくなってしまったのかもしれない。もう少し早くに‘勝っても負けてもこれで最後、続きは明日にしよう’というような区切りをつけてもよかったのかもしれない〉と考えを伝えた。

〈考察〉

学生は「わざと負けない」「わざと負ける」が拮抗していた。様々な意見を聞くうちに、保育者の対応によって子どもがどう感じるのか、子どもにどのような影響があるのかを考えるようになっていく。以下に感想を取り上げて記載する。

〈第2回感想より〉

「関わりに正解はないのかもしれないが、真剣に向き合っても泣かせてしまうし、手加減しても悔しい思いをさせてしまう。非常に難しい問題で考えさせられた」

「負けを経験することも大切だが、完全に心が折れてしまうとやる気の低下につながるので、勝敗のバランスを取りながら関わる必要がある」

「先生が負けるのか勝ち続けるのか意見が割れた。私は最後には負けてあげてもよいと考えていたので、反対意見が出たときには驚いた。しかし、反対意見の考えを知ると、先生が勝ち続けることが間違っていないと思った」

「先生がわざと負けると子どもは本気で相手をしてもらえず悔しく思うだろう。しかし、勝てないとつらいし悔しいし勝てるまで折り合いがつかない。正解が分からない」

このようなどちらがよいと言えない内容、言い換えると両義的な意味をもつ内容を保育は常に含んでおり、保育者はその都度判断を行っているが、学生が葛藤しながら考える事例体験となった。

2. 幼児理解と援助の多様性

(第6回：記述の集計、第7回：フィードバック)

〈授業の流れ〉

〈事例の概要〉

・4歳児クラス4月 Bくんと別のクラスのCくん(家族ぐるみで仲良し)

・毎朝、CくんがBくんを誘いに来る。Bくんはお店屋さんや美容院ごっこが好きだが、誘われるとついて行ってヒーローごっこをする。担任は「Bくんがしたいことをしてもいいんだよ」と言うが、Bくんは誘いを断らない。

学生には「BくんとCくんにどのように関わるか考えてみましょう」という内容で記入用紙に記述してもらった。学生の記述内容を意味内容のまとまりがある文節毎に取り出し、対応・援助の対象をもとに分類を行った。その結果、①Bくんへの対応、②Bくんの気持ちの推測、③Cくんへの対応、④ふたりに対しての対応、⑤クラス全体や普段の生活の中での援助、⑥保育者の連携という6項目の内容に分類された。各項目の内容は、以下の通りである。

①Bくんへの対応

- ・自分の気持ちを言ってもいいと伝える。
- ・何をして遊びたいのか気持ちを聞く/確認する。
- ・保育者がBの気持ちを代わりに伝える。
- ・Cをごっこ遊びに誘おうと提案する。
- ・Cへの言い方を一緒に考える。
- ・困ったときは、先生に言ってねと言っておく。
- ・Bをごっこ遊びに誘う。先生もやりたい遊ぼうと誘う。
- ・保育者がまずBの好きな遊びをして誘う。/やってみたいと思えるようにする。
- ・無理には主張させない。
- ・一緒に遊んでいないときに、やりたい遊びができるようにする。
- ・遊びが終わったら、声をかける。

②Bくんの気持ちの推測

- ・Cのことが大好き
- ・自分の遊びをするよりも、Cと遊びたい気持ちの方が強い/楽しい/大切。
- ・「遊び」よりも「遊ぶ人」に興味がある。
- ・Cと一緒に遊んで何が楽しいのかをよく見る。
- ・嫌がってはいないかを見る。我慢しているのなら、声をかける。
- ・ヒーローごっこにも興味が向いている可能性がある。

③Cくんへの対応

- ・Bのしたいことを聞くように言う。
- ・保育者がBの気持ちを伝える。
- ・保育者がBのしたい遊びをしてみないかと提案する。ごっこ遊びに誘う。
- ・保育者がCを誘って遊び、Bを自由にする。

<p>④ふたりに対しての対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・そのまま見守る。保育者の考えを伝えるが見守る。</li> <li>・ふたりの関係が崩れないように関わる。</li> <li>・ふたりの仲の良さを認める。ヒーローごっこを肯定する。それから提案する。</li> <li>・ふたりのことを知るために、ふたりでどのように遊んでいるのか聞く。</li> <li>・保育者も加わって、3人で話をする。Bが発言しやすいように問いかける。</li> <li>・やりたい遊びを順番に言う機会をつくる。</li> <li>・保育者がCの前で先にBを誘ってみる。</li> <li>・保育者がふたりの遊びに加わって働きかける。</li> <li>・保育者がごっこ遊びをして、ヒーローごっこのふたりを誘い入れる。</li> <li>・保育者がまずBをごっこ遊びに誘い、そこにCを誘うように言う。</li> <li>・他の子どもへも目が向けられるように働きかける。</li> <li>・自分のクラスに馴染めるように関わる。</li> <li>・関係が変わらないままでは成長につながらないので、違う遊びにも目を向けることができるようにする。</li> <li>・遊びを合わせられないか考える。(例：ヒーローごっこのお店屋さん、ヒーローに人気のお店屋さん、武器屋さん、ヒーロー遊びの休憩時にごっこ遊び)</li> </ul>
<p>⑤クラス全体や普段の生活の中での援助</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他児もふたりの遊びに関われるような機会をつくる。</li> <li>・ごっこ遊びが他の時間にもできるようにする。主活動にごっこ遊びを取り入れる。</li> <li>・ごっこ遊びの新たな道具を取り入れてごっこ遊びにもっと興味が向くようにする。</li> <li>・普段の生活の中で、自己発揮ができるように関わる。</li> <li>・簡単なことから自分でできるようにする。</li> <li>・他児と関わる機会をつくる。</li> <li>・クラス別で遊ぶ時間をつくる。</li> </ul>
<p>⑥保育者の連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Cのクラス担任と相談をする。</li> </ul>

この資料を第7回授業で配付し、フィードバックを行った。教員からは、〈学生全員の考えを合わせると、様々な視点からの援助が考えられており、どの考えも状況によって生かせるのではないか〉〈対応や援助を考えると、子どもの気持ちを尊重しようとする学生や、もし〇〇の状況ならと推測をしながら考えている学生が多かった〉〈様々な考えが出る理由として、

事例の文章だけでは情報が限られており、人によって想定が異なっていること、もともと各々の保育観が異なっていること等が考えられる〉〈実際に保育現場に勤めたときには、保育者同士が共有できる方法を見つけ出せるのではないかと伝えた。

フィードバックについて第7回感想には、「たくさんの対応の仕方があり、自分が思いつかなかった対応などもあってとても参考になった。毎回正しい判断ができるということは難しいかもしれないが、自分が考えた中で最善の方法をすることが大切なのだと思う」  
「事例を考えることで、子どもの気持ちを考えたり、保育者の思いや援助の意図を考えたりとその行動について深く考えることができています」「いろいろな声かけの方法があり、その子にあった声かけをするために日々の関わりが大切だと考えた」等の記述があった。

#### 〈考察〉

学生は1～2個の考えを記述しているが、考えを出し合ってみると、このように多様な対応があることに気づき、素直に驚いて今後生きかそうとする姿が見られる。対応は子ども理解によって異なるため、対応を考えた理由について、子どもの気持ちを推測して記述に加えている。また、Bくんの対応だけでなく、周囲へも視点を向けて方法を考え始めている。

### 3. 幼児理解が困難な事例の読みとり

#### (第10回：課題の記述とグループワーク)

#### 〈授業の流れ〉

#### 〈事例の概要〉

- ・5歳児クラス 10月 Dちゃん(女児、6歳)
- ・Dちゃんは、一人で絵を描いていることが多く、年下の子どもと砂場でよく遊ぶ。言葉の発達や手指の巧緻性などが幼く見え、身体を動かすことが不得意で同じクラスの子どもたちと関わって遊ぶことが少ない。しかし、他児はDちゃんを拒むことなく活動に入れており、担任は気かけながら関わっている。Dちゃんの母親は、小学校の就学時健診を控えて心配している。

#### 〈個別課題、グループワーク課題〉

1. もし担任だったら、Dちゃんにどのようなねらいをもち、どのように関わるか。
2. 個人懇談会で保護者とどのような話をするか。

はじめに、学生一人一人がどのように考えるかを課題プリントに記述し、次にグループで考えを出し合った。そして、どのような話が出たかを代表者が発表し、情報共有を行った。発表内容について、以下にまとめた。

〈グループワークの発表〉

Dちゃんへの関わり

- ▶ 思いが表せるように援助する。
  - ・ Dちゃんと目を合わせて関わる。
  - ・ Dちゃんに共感する。
  - ・ Dちゃんの気持ちを代弁する。
  - ・ Dちゃんの好きなことを一緒にする。
- ・ 保育者からコミュニケーションをとって、言葉を引き出す。
- ・ Yes・Noで答えられるような具体的な問いかけをする。
- ・ 保育者もごっこ遊びに入り、気持ちが表せるように促す。
- ▶ 見守る。
  - ・ Dちゃんの気持ちを尊重して／ペースに合わせて見守る。
  - ・ Dちゃんに誘われたら一緒に遊ぶ。
- ▶ 友達と関わるように援助する。
  - ・ 一人で遊ぶ時間を減らし、友達と関わるようにする。
  - ・ 少人数の遊びから大人数へと増やしていく。
  - ・ 自分から積極的に遊びに入るきっかけを作る。
  - ・ グループの遊びを取り入れる。
  - ・ 思いを主張できる機会（発表や遊びの中での発言）を作る。
  - ・ クラスで共同制作をする。
- ▶ 小学校の先生とつながる。
  - ・ 小学校の先生と積極的につながりをもつ。
  - ・ Dちゃんのことを説明する。

保護者対応

- ▶ 園の様子を伝える。
  - ・ Dちゃんの良い面をほめる。
  - ・ Dちゃんができていることや興味をもっていることを伝える。
  - ・ 友達関係は悪くないと伝え、安心してもらう。
  - ・ ニコニコして年下の子に関わる様子を伝える。
  - ・ 自分から行動している様子を伝える。
  - ・ できないことをがんばっていると伝える。
- ▶ 母親から話を聞く。
  - ・ 家での様子を教えてもらう。

- ・ 心配なことを尋ねてサポートする。
- ・ 小学校への不安を具体的に聞く。
- ・ 家でも働きかけてもらうようお願いする。
- ・ 家での関わりをどうするか考える。

▶ 発達について

- ・ 発達の遅れ等悩みを共有し、不安を減らせるようにする。
- ・ 発達の遅れは心配することはないと伝える。
- ・ とにかく安心してもらう。
- ・ 発達の遅れがあると伝える。
- ・ 専門家に相談するように伝える。

発表の内容を受けて、教員からは発達を見る視点として、〈この事例の資料だけでは、Dちゃんの発達をどのように捉えるか大変難しいが、小学校では環境が大きく変わるため、Dちゃん一人の力では生活や学習についていけなくなるおそれがある〉と、通常の受けとめや対応では不十分ではないかと思いを述べた。また、〈これまで保育者がよく考えて働きかけをしてきた上での今の状態であると捉えること〉〈友達をモデルにして行動している子どもには、しっかり理解できているのかをよく見ることが大切〉と伝えた。

一方、保護者対応については、〈母親に寄り添う、母親の気持ちを援助するというのは基本の方法ではあるが、子どもの心配な面をよく話し合う必要がある〉〈安易に大丈夫であると言ってはいけない〉と伝え、就学時健診の内容、保護者が小学校に発達相談する方法、保育者が小学校に申し送りする方法などについて説明をした。

〈考察〉

前述のBくん・Cくんの事例と比較すると、グループワークで考え出された対応方法は限定されている。子どもを受容し認めるだけでは不十分な事例に対する手詰まり感は否めない。特に気になったのは、子どもへの対応について「思いを表したり友達と関わったりする場をつくる」と述べながら、なぜ5歳児半ばでできていないのか子どもの状況を探るという考えが出ていないということである。また、保護者について「子どもの良い面を伝えて安心してもらう」という意見がグループの半数以上にのぼったことである。

子どものよい面を捉えて伸ばすという方法は、専門科目の中で基本的な対応として学んでおり、学生は元々子どもが好きで好意的に接する態度があるため、学生が身に付けている方法である。しかし、学生には、発



達に心配がある場合の想定や発達の見極めは難しい。それは、現場の体験の少なさが影響していると考えられる。ほとんどの学生は実習を体験しており、気になる子どもに関わり保育者等が必死で対応している姿を見たりしていても、まだとにかく子どもに関わってみるという段階であることが分かる。

また、学生の立場で保護者対応をすることはないため、保護者の気持ちを推察しようとする思いや態度はあるものの、対応に戸惑いがあり、結果的に良いことだけを伝えてしまう、あるいは伝えたい内容をうまく言語化することができないことがうかがわれる。

学生が持っている知識や技術、これまでの経験だけでは難しく、理解しようとしてもなかなか納得感が得られにくいという体験となった。

#### IV アンケート結果

第15回授業で到達目標を確認し、自身にどのような力が身についたかアンケートを行った。アンケートは無記名で、出席者110名が回答した。

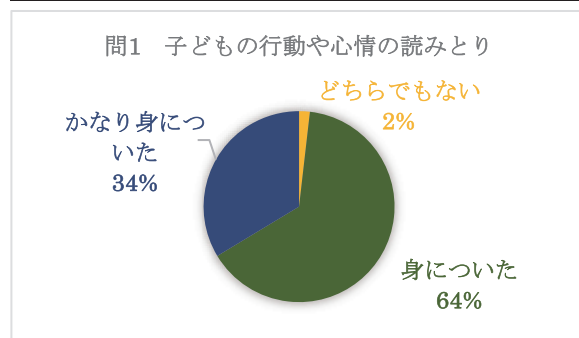
身についた内容として以下の問について集計を行った。

- 問1 子どもの行動や心情の読みとり
- 問2 子どもの発達の捉え
- 問3 先生のねらいの理解
- 問4 先生としての関わりや対応の方法
- 問5 自身の保育観の気づき

学生には、「1身につかなかった」「2あまり身につかなかった」「3どちらでもない」「4身についた」「5かなり身についた」の5択で答えてもらった。

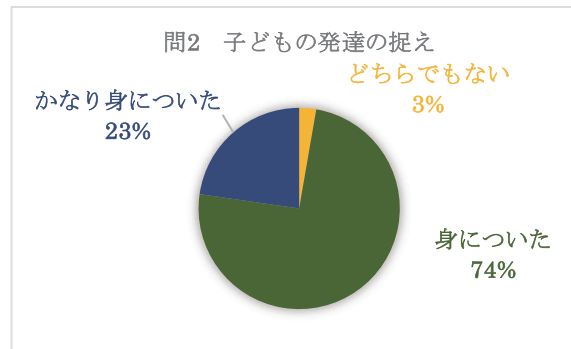
問1 子どもの行動や心情の読みとり

身につかなかった	あまり身につかなかった	どちらでもない	身についた	かなり身についた
0	0	2	71	37



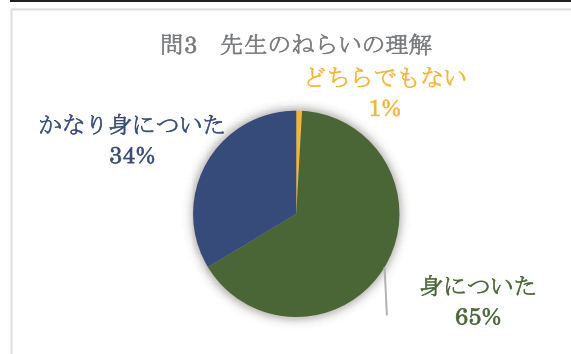
問2 子どもの発達の捉え

身につかなかった	あまり身につかなかった	どちらでもない	身についた	かなり身についた
0	0	3	82	25



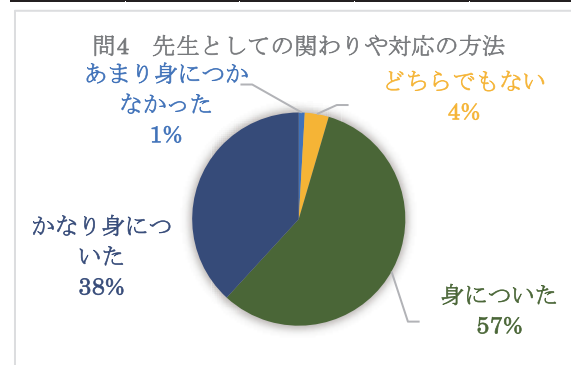
問3 先生のねらいの理解

身につかなかった	あまり身につかなかった	どちらでもない	身についた	かなり身についた
0	0	1	72	37



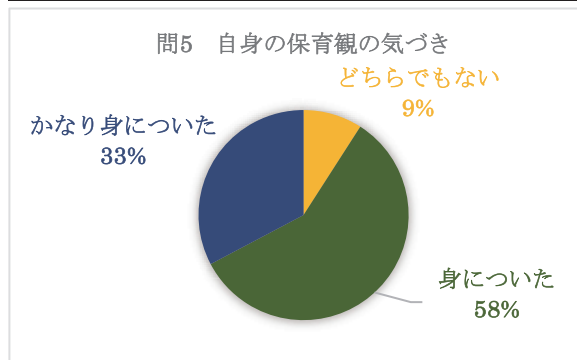
問4 先生としての関わりや対応の方法

身につかなかった	あまり身につかなかった	どちらでもない	身についた	かなり身についた
0	1	4	63	42



### 問5 自身の保育観の気づき

身につかなかった	あまり身につかなかった	どちらでもない	身についた	かなり身についた
0	0	10	64	36



#### 〈考察〉

「幼児理解」に関して、「子どもの行動や心情の読みとり」と「子どもの発達の捉え」を挙げた。どちらの問いも「身についた」「かなり身についた」を合わせると97～98%の学生が選んでおり、特に「子どもの行動や心情の読みとり」については、3人に一人の学生が「かなり身についた」と答えている。子どもに対する関心の高さが感じられ、子どもの行動の意味を考えたり目には見えない心の内を推測したりしながら学んだことがうかがわれる。

「先生のねらいや対応」に関して、「先生のねらいの理解」と「先生としての関わりや対応の方法」を挙げた。「先生のねらいの理解」については、99%の学生が「身についた・かなり身についた」と答えている。「先生としての関わりや対応の方法」については、「かなり身についた」38%、「身についた」57%となっており、学生自身の感覚ではあるが、自身の対応方法の幅が広がったと感じているのではないだろうか。

「自身の保育観の気づき」については、他の問いより少し値が低くなっているものの、9割以上の学生が「身についた・かなり身についた」と感じており、自身が担任だったらどうするかと考える中で、他の学生との意見の違いに気づき、自身の考え方や価値観について気づく機会となったと考えられる。

## V まとめ

### 1. 両義性の気づき

保育には常に両義性が存在し、保育者は葛藤の中で、目の前の子どもに最善となるような判断を行っている。

例えば子どもの思いと保育者のねらいの間の両義性、個人に対するねらいと集団に対するねらいの間の両義性などである。

実践報告1では、勝敗を争う遊びの中で、保育者が手加減するのかわしないのか意見が分かれた。学生はどちらかという子どもの思いを叶えさせてあげたいという方に傾きがちである。そのため、子どもの前に立ち足かのように見える保育者に驚いたり否定的に感じたりすることがある。この事例の他にも【水たまりに新品の靴で入ろうとする4歳児を入らせるか止めるか】【制作の時に、糊ではなくセロテープを使いたいと主張する3歳児を許可するのかわしないのか】等、保育者が瞬時に判断を求められる場面で考察をしてきた。判断の基準となるのは、「幼児理解（発達の状態を含めて子どもをどのように捉えるのか）」と「保育者のねらい（体験により子どもが何を学び身に付けるのか）」との間で揺れ動きながらどちらを優先するべきかという観点である。このように、保育には両義性が存在しており、保育者が様々な観点から判断していることが理解できるようになり、現在の自分にはまだ難しいが必要な専門性であることを認識し始めている。

両義性を伴う中で判断していくことは難しいが、保育者の主体性を発揮できる保育の面白さや奥深さに触れる体験になると考える。

### 2. 多様性の気づき

経験が10年以上の保育者は、子どもの様々な情報を総合して子ども理解を進め、対応の方法を多様に想定して、今後の状況に応じられるように選択肢を準備している。これは、養成段階の学生には大変高度なことである。しかし、みんなで考えを出し合うことで、経験者には及ばないが、子どもを見る視点や理解の仕方、対応の方法など多様であることに気づき、今後のヒントになるような体験ができるのではないだろうか。

実践報告2では、自分のやりたいことが言えずに誘われるまま行動する子どもに対し、どのように関わればよいのか考察した。該当の子どもへの多様な関わりだけでなく、相手の子どもやクラス全体の子どもへの関わり、保育者同士の協力など、多様な視点が挙げられた。この事例の他にも【積木にのりたいたい0歳児への援助方法】【カブトムシを見るときに3歳児がトラブルにならないようにする方法】等、いろいろな実践事例を検討する中で、学生は多様な見方や方法があることに気づき、興味深く感じて取り入れようとする姿が見られた。また、学生は目に見えたままに解釈しがち

である。そのため、【子どもがきっとやりたいと言いつ出すと想定して黙々と活動する保育者の話】等、保育者の援助には目に見えないものがあること（例えば保育者が気づかないふり等の演技をしていたり、わざとモデルになるような行動をしていたりすること）に気づくとたいへん感銘を受ける様子が見られる。

多様な見方や方法の中のどれを選択するかは「幼児理解」と「保育者のねらい」によって判断していくものであること、「幼児理解」や「保育者のねらい」が異なる背景には、自身のこれまでの経験や保育観が影響していることを認識し始めている。

多様性をもって考えることは難しいが、保育者の主体性を発揮できる保育の面白さや奥深さに触れる体験になると考える。

### 3. 幼児理解と対応の難しさに触れる

保育者が必要と感じている研修内容の上位に「特別な支援が必要な子どもの理解と対応」が挙げられている<sup>10)</sup>。学生は学んできた方法を使おうとするが、子どもを理解することや対応を考え出すことは容易ではない。授業では、実践報告3以外に、約半数の回で【気になる子どもの事例】を取り上げ、【特別支援教育をテーマにした動画】を視聴して、子どもの立場からの事情や思い、保育者や教員の立場からの事情や思いを考察してきた。特別な支援に関して理解と対応が難しいのは、一人一人の子どもが異なっており、実際に関わってみないと子どもや先生の困り感が分からないためである。学生は、「子どものために何とかならないか」と思いながら「先生も大変。もし自分だったらできるのか?」とも思っている。まずは、いろいろなケースがあることを知り、子どもを尊重しながら試行錯誤する先生をモデルにして参考にしていこうとする態度が育つことを見守りたい。

### 4. 振り返りアンケートより

学生自身の感覚ではあるが、学生は本科目の到達目標である「幼児理解」に真摯に向き合い、基本的な考えや態度を身に付け、また、保育者のねらいや子どもに対する思いを推測して、対応や援助のあり方について理解を深めることができたのではないかと考える。

## VI 今後の課題

### 1. 自由に意見を出し合える関係づくり

受講している3年生は、コロナ禍が始まった2020

年度に入学し、1~2年生の間、登校が思うようにできず、教員や友達とのコミュニケーションの機会が大きく制限されてきた。各実習は、延期を繰り返しながら何とか体験することができた。そのため、コロナ禍前の修学状況と比較すると、自身の意見を言ったり他者の意見を聞いたりする機会、演習の機会、実習以外に子どもと触れ合う機会が大変少ない。そのため、この授業ではまず、他者と一緒に学びの実感を持ち、自分の言葉で表現する体験をしてほしいという願いをもって、発表やグループワークの機会を設定した。学生は、「様々な考えを聞くことができてよかった」「自分とは異なる考えに驚いたが、理由を聞くと納得できた」「他の人の考えを聞いてあらためて考えた」「自分と同じ考えの人がいて、考えていることを話してもよいのだと思った」という感想の記述が毎回ある。

このように意見や考えを出し合い発見する体験を様々な場面で体験できたが、異なる意見を議論するところまでは不十分で、教員が見解を述べるにとどまった。今後、学生同士が異なる意見を模索し考えを深める機会を作ることが課題である。

### 2. 希望の進路に生かすことができる内容

「幼児理解」は主に幼児期が対象であるが、学科の必修科目であるため、学生の進路希望は保育士・幼稚園教員・小学校教員・中学校教員・施設保育士等々である。そのため、乳児から小学生を対象に実践事例を選び、小・中学校の教員のデータも取り入れた。「幼小接続」はすべての学生が興味をもつ内容だったが、自身に関わる子どもの年齢や発達段階が合わなかったとしても、学生は関連させて考えようとする姿勢が見られた。しかし、小・中学校希望者の中には、「テーマによっては同じ進路希望の人とずっと話がしたかった」という感想があり、科目としての役割を保ちながら、多様な交流ができるように考えていくことも今後の課題である。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2019) 「幼児理解に基づいた評価」  
幼児理解に基づいた評価 (平成 31 年 3 月)  
(mext.go.jp) (2023 年 1 月 5 日閲覧)
- 2) 文部科学省 (平成 27 年告示) 『幼稚園教育要領』
- 3) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』
- 4) 文部科学省 (2002) 「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために－」  
「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚

- 園教員のために」(報告)：文部科学省 (mext.go.jp) (2023年1月5日閲覧)
- 5) 文部科学省中教審答申(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学びあい、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」  
これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)(中教審第184号)：文部科学省 (mext.go.jp) (2023年1月6日閲覧)
  - 6) 保育教諭養成課程研究会(2017)「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」  
幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究：文部科学省 (mext.go.jp) (2023年1月5日閲覧)
  - 7) 高濱裕子(2000)「保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応」発達心理学研究 第11巻 第3号 pp.200-211
  - 8) 佐藤有香・相良順子(2017)「保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い」日本家政学会誌 第68巻第3号 pp.103-112
  - 9) 請川滋大(2020)『子ども理解 一個と集団の育ちを支える理論と方法－』萌文書林
  - 10) ベネッセ総合教育研究所(2019)「第3回幼児教育・保育についての基本調査」  
第3回 幼児教育・保育についての基本調査 | ベネッセ教育総合研究所 (benesse.jp) (2022年9月7日閲覧)